

われた施設であるが、この事実は強制捜査後に明らかとなった。



上九一色村に建設されたオウム関連施設第10サティアンと第7サティアン  
及び第7サティアン一部拡大写真で巨大なスクラバーが確認できる。

この時点でオウム施設への強制捜査をかける案件が6つもあったのであるが、全ての施設に強制捜査をかけるには法的根拠が乏しい難点があった。そのような状況の中1995年元旦を迎える。1995年1月1日、読売新聞はスクープ記事を掲載する。

# サリン残留物を検出

## 山梨の山ろく「松本事件」直後

### 関連説明急ぐ

長野・山梨  
県警合同で

【山梨県山梨市】山梨県警と長野県警が合同で、山梨県山梨市と長野県山ノ内町の山ろく地区で、サリン製造に関与したと見られる有機リン系化合物の残留物を検出した。山梨県警は、この残留物の検出について、関係者に説明を急ぐとしている。



山梨県警と長野県警が合同で、山梨県山梨市と長野県山ノ内町の山ろく地区で、サリン製造に関与したと見られる有機リン系化合物の残留物を検出した。山梨県警は、この残留物の検出について、関係者に説明を急ぐとしている。

山梨県警と長野県警が合同で、山梨県山梨市と長野県山ノ内町の山ろく地区で、サリン製造に関与したと見られる有機リン系化合物の残留物を検出した。山梨県警は、この残留物の検出について、関係者に説明を急ぐとしている。

山梨県警と長野県警が合同で、山梨県山梨市と長野県山ノ内町の山ろく地区で、サリン製造に関与したと見られる有機リン系化合物の残留物を検出した。山梨県警は、この残留物の検出について、関係者に説明を急ぐとしている。

上記のスクープは警察そしてオウム真理教にも衝撃があった。警察内部では直ちに強制捜査に入るべきという積極意見もあったが、更に裏付け捜査が必要との慎重案もあった。オウム真理教という宗教法人格が捜査員の決心を鈍らせていたのは否めない事実であろう。一方オウム側も直ちに対応にあたった。麻原は中川に対してサリン関係薬品をすべて処分するように指示、第7サティアンの工事は1995年1月1日以降完全に中止され、「宗教施設」への偽装隠ぺい作業へ移行した。中川によれば、オウムのサリン製造はいつかはマスコミに漏れるだろうと思っていたが、そんなに早く表面化したことに驚いたという。差し迫っている警察の強制捜査で発見されるのを恐れ、教団での上位者が中川に対し、サリン（約20リットルが保管されていた）、VX液剤（約100～200ミリリットル）、ソマン、麻薬類、およびこれら物質の前駆体を含む、すべての違法化学物質を廃棄するよう命令されたとのことである。廃棄作業は急を要し、最初の3日間は寝ていなかったと中川は回想している。廃棄・隠蔽の

作業は、2月の末までかかったようである。この際、廃棄しきれなかった前駆物質を使用して合成されたサリンが使用されたことは前述の通りである。



プラントを隠ぺいしたシヴァ神像（左）と  
シヴァ神像を取り外した状態のプラント施設（右）

## 第7節 地下鉄サリン事件

### (1) 事件前（3月18日及び19日）

3月17日（金）の夜、教育訓練用VTRの完成確認を終えて深夜帰宅した自宅に留守電が入っていた。化学学校当直からの伝言で「明日出勤されたい。」との内容、せつかくの休日に何事かと思いながらも出勤すると、教育部内が妙に騒々しい。聞けば緊急に神経剤防護訓練を朝霞で行うとのこと、教育編成で検知、防護、除染の機能に区分し、朝霞駐屯地に移動、駐屯地体育館で器材を展開、防護衣、防護マスクは400個セット準備した。

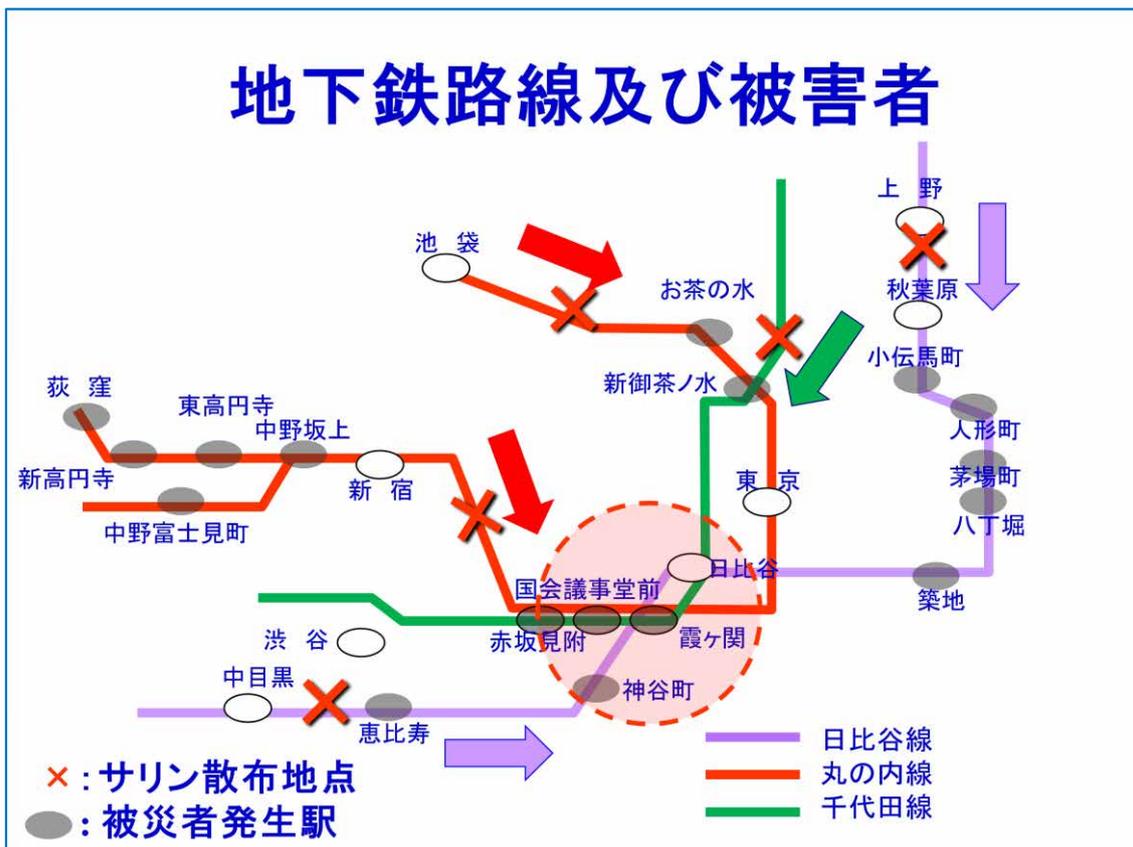
翌19日朝10時頃と記憶しているが、教育対象部隊が朝霞駐屯地に到着、その姿に正直驚きを隠せなかった。教育対象者は機動隊隊員400名であったからだ。当初、機動隊隊員にマスクと防護衣を400個セット交付し、それぞれの区分ごと約100名に神経剤の特性、効果、検知、防護及び除染の概要を教育することとなった。特に防護装備に装着に関しては詳しく行っていた記憶がある。約半日教育を行い、教育終了後仲間内で「近々サリンに係る警察の強制捜査あるんだろうな」との耳打ち話をしていた。

### (2) 事件当日（3月20日）

#### ア 事件発生時

1995年3月20日は、日曜日と春分の日に挟まれた平日の月曜日で、当時3月22日が陸上自衛隊主要幹部の定期異動発令の日であったため、多くの自衛官は代休を取得、出勤する者は少数であった。前日機動隊に教育訓練を行った化学学校職員の多くも代休を取得しており、筆者は当日出勤した少数派であった。8時を少し回った頃、教官室の電話が鳴った。取ると某師団化学幹部から「アセトニトリルって何？」の問い合わせで

ある。化学屋にとってアセトニトリルは典型的な有機溶媒である。その旨を伝えると「人死ぬ？」と聞いてくる。アセトニトリルでの死亡例はほとんど聞いたことがない。「多量に吸い込めば死ぬことはあるだろうけど、そんな話は聞いたことがない。」と回答した。その電話を切るとまた同様の問い合わせである。同様の回答をして電話を切ると、相当に慌てた様子で校長副官が教育部に来て同じことを聞いてきた。「アセトニトリルで何かあったんですか？」と問い返したところ、「テレビをつけて見てくれ」と言ってそそくさと帰っていく。不思議に思ってテレビをつけたところ、緊急報道で都内の地下鉄出入口での惨状が伝えられていた。その症状は、「目が痛い」、「暗い」、「息苦しい」といったものである。テレビから流れてくる被災者の症状は我々にとって典型的な神経剤の症状であった。その瞬間、これはアセトニトリルではない。神経剤だ。と直感した。ただ、その時は自分がまさか現場に行くとは夢にも思わず、テレビの前の一視聴者となって、警察、消防がどう対応するのか他人事のように眺めていた。サリンが散布された地下鉄路線及びその際の被災者の状況は以下のとおりである。





被害に苦しむ被災者

出典：サリン事件 産経新聞社

この時実際にサリンの分析にあたったのは当時警視庁科学捜査研究所職員の服藤恵三氏である。警視庁科学捜査研究所の薬毒物担当係長だった服藤氏は2015年3月16日の時事通信でサリンの分析にあたったことを次のように回想している。以下抜粋する。



元科学捜査研究所研究員 服藤氏

「サリンの可能性は頭にあった。それでも驚がくした」。20年前、危険を感じながら急いだ鑑定作業を今も鮮明に覚えている。あの日、普段通り東京・霞が関の科捜研に出勤し、白衣に着替えた。15分ほどするとサイレンが聞こえ、音は増え続けた。無線を聞きに行くと、「築地駅で多数が倒れている」。他の複数の駅も同じ状態らしい。緊急鑑定の準備を始めた。午前9時5分ごろ、築地署の刑事が飛び込んできた。「車両の床から拭き取ってきました」。手には3重のポリ袋。薄い茶色か黄色の、湿った脱脂綿が入っていた。

現場の様子を「けいれんする人、泡吹く人、意識のない人がいた。共通して『暗い、暗い』と訴えています」と説明し、続けた。「実は私も暗いです」。刑事の瞳は針穴のように縮んでいた。縮瞳である。「有機リン系毒物だ」。屋上へ駆け上がった。手袋とマスクを忘れたことに気付いたが、「3分も惜しい」。風上を背に作業に取り掛かった。1枚目の袋を解いて三角フラスコを入れ、ピンセットで脱脂綿を落とした。手に付かぬよう、袋の上からフラスコを持った。同34分、装置が分析結果を出した。「サリン」前年夏に長野県松本市でまかれたものだ。震えも脂汗も出なかったが、頭の中で「やはり」と「なぜ」が錯綜（さくそう）した。』



地下鉄サリン事件でオウムが使用したサリン

また、信州大学柳沢教授もサリンを疑った一人である。柳沢氏は松本サリン事件での診療記録をFAXで聖路加病院に送付、聖路加病院での治療の一助となっている。また、当時自衛隊中央病院に勤務していた青木先生もまた聖路加病院において神経際による症状を指摘、助言を行っている。以下は青木先生の述懐である。

週が明けた3月20日の月曜日、約2ヶ月ぶりに病院に復帰しました。病棟に入院患者がいるわけでもなく、医局や外来、病棟にAOCから戻ってきたことを報告し、8時半頃に外来待合ロビーを歩いていたところ、テレビのニュースで「都心地下鉄内で爆発事故の模様」というアナウンサーの声が聞こえました。同時に、ポケベルが鳴り、医局に戻ってみると、「青木医官、警視庁から省庁間協力で自衛隊に依頼が来た。地下鉄内で起こった爆発事故で多くの負傷者が出ているので救援を求むとのことだ。その白衣のままでもいいので、玄関前に待機しているアンビュ（救急車）に乗って、L0（連絡担当幹部）が行っている飯田橋の警察病院へ直行してくれ。L0は青木医官もよく知っているM医官だ。」と、上官からの指示がありました。AOCに入校していた防衛医大9期の陸上自衛隊医官を中心に、海上・航空自衛隊の医官と看護官数名もメンバーに組み込まれ、午前9時前に自衛隊中央病院を出発。その際に、なんとはなしに「何かの役に立つかもしれない

い」と思い、医局の机の上に放置してあった衛生学校でもらった教本や資料を一緒に持って行ったのでした。

9時半前に警察病院に着くと、先輩のM先生が情報収集した状況を説明してくれました。「午前8時頃、都心のいくつかの地下鉄路線内で大量傷者が発生。当初は爆発事故との情報であったが、どうやらそうでは無い模様。聖路加国際病院他、いくつかの病院に多くの負傷者が搬送されている。手分けしてそれらの病院に行き、初期治療の援助に当たって欲しい。おっ、青木！お前は先週までAOCだったな。大量傷者には慣れてるだろう。一番、患者数の多い聖路加に向かえ。」と。仲の良い先輩だったので、他の医官を指名するよりも頼みやすかったんだと思います。僕自身も、阪神・淡路大震災（AOC入校中の1月17日に起こった）の際の医療支援部隊としては、行くことが叶わずにいたため歯痒い思いをしていたので、「先輩、任せてください。阪神・淡路の時に力になれなかった分、一生懸命全力でやってみせます！」と応えていました。

再び、アンビュに乗り、飯田橋から築地の聖路加国際病院へ向かいました。天気の良い、朝から暖かい春の日でした。皇居あたりの外堀通りは一般車両の通行はストップされ、救急車やパトカーがサイレンを鳴らしながら、走っている光景は異様なものでした。地下鉄の地上出口付近には多くの人がうずくまり、倒れて口から泡を吹いている人もいました。「一体、何が起こったんだろうか？」

10時前に聖路加国際病院に到着。副院長先生、内科部長先生に「自衛隊中央病院から派遣された医官と看護官です。お手伝いさせて下さい。」と挨拶したところ、副院長のM先生が、「自衛隊の先生方、ありがとうございます。うちでは外来診療をストップさせ、手術も緊急オペ以外は全て延期に。非番のスタッフたちにも全員招集をかけて対応しています。すでに300名以上の負傷者がいます。日野原院長が前線に立ち、軽症、中等症、重症の分類をします。自分で歩けるような軽症患者は2階にある礼拝堂へ、中等症はストレッチャーで9階の病棟へ、重症患者は救急外来からそのままICUへ運んで対処しています。先生方は軽症患者のいる礼拝堂へ行って診察治療にあたっていただけますか。」同時に神経内科のO先生が「実は、すでに、亡くなった方がお一人。CPA（心肺停止状態）の方がお二人、痙攣を起こして意識のない重傷者がお二人います。これまでの情報では、アセトニトリルが検出されていて、それによる中毒だと考えたのですが、過去の文献を調べてもそこまで重篤になるようなことがアセトニトリル中毒では考えられず、何がなんだがわからないのです。」と言われました。

すぐに2階のトリスラーホール（礼拝堂）に行き、負傷者の診察を開始しました。5～7人、時間にして10分もなかったでしょうか、皆一様に「胸が押されるようで、息が苦しいんです」、「目の前が暗くて見えにくい」、「目の奥が痛いです」という訴えを…背中に緊張が走りました。「こ、これは、10日前に答案用紙に書いた5つの臨床徴候だ!」。改めて、患者の目を見ると、見たことのないピンポイントの縮瞳を全員が呈しています。すぐに、聖路加の先生に、「これは神経剤、いわゆる毒ガスに晒された時の







聖路加病院チャペル内での被災者対応状況

後日、米軍とイスラエルの軍医が自衛隊中央病院に来て、当時の状況や診断・対処法について細かく聞かれました。「このような状況で死者が十数名というのは、ミラクルだ。」と言って帰って行きました。

自衛隊は平時にきちんと有事に備え、しっかり準備しているのです。色々な偶然が重なって、自分が600名以上の負傷者を受け入れた聖路加国際病院に派遣され、多少なりとも日本国民のお役に立てたことは僕の人生で最も大切に貴重なことでもありました。医療機関は、医療機関内で被災者治療に全力を傾けていたことがわかる事例である。

#### イ 非常呼集から市ヶ谷へ

医療機関とは異なる動きではあるが、組織の動きは速かった。直ちに非常呼集がかけられ、それぞれ自宅に電話呼集がかけられたが、悲しいかなその大多数は留守電となっていた。当初は留守電に詳細を伝えていたが、時間が惜しいため、「非常呼集。帰宅後直ちに出勤せよ。」となっていた。その後化学学校は6名の幹部を市ヶ谷に派遣することを決定、10時30分頃市ヶ谷駐屯地に向けて出発することとなった。市ヶ谷到着までの間、11時頃に原因物質はサリンであるという警察発表を受け、除染剤を水酸化ナトリウムにすることとし、市ヶ谷に到着後速やかに水酸化ナトリウムの緊急調達及び補給の旨を武器補給処十条支処（化学科物品の調達補給に携わる機関）に依頼した。また、32普通科連隊は除染活動のための資器材の集積、点検に大わらわの状態であった。

#### ウ 災害派遣要請受けから現場進出まで

12時50分、都知事から第1師団長に対して災害派遣要請が入り、当時32普通科連隊長であった福山1佐から災害派遣に当たっての訓示を受けた。この際、連隊長から「現場は、その部隊の最高階級の者が指揮を執れ。」との指示があり、ここで初めて自分が現場に赴き、指揮を執るとの意識が確立された。また、「隊員を殺さないでくれ。」との言葉もあり、この段階で除染準備を普通科連隊の隊員が、除染を化学科の隊員が実施するという考えを固めていた。その後、警察車両の先導の下で市ヶ谷駐屯地を出発し、築地駅